

## □ 各地の音楽活動 ● 北海道

### 八木幸三

2014年の**札幌交響楽団**は、北海道にゆかりの深い生誕百年を迎えた作曲家二人の作品が定期演奏会で取り上げられた。5月定期では、「日本狂詩曲」をはじめ全曲伊福部昭作品が並び、高関健が丹念にスコアを読み込みながら精緻に音楽をまとめ上げた。8月定期では、下野竜也の指揮で、早坂文雄の交響組曲「ユウカラ」が札幌としては初の全曲演奏をおこない、作曲者の峻厳な魂を感じさせる演奏を聴かせた。音楽監督の任期が最終年度となる尾高忠明は、シベリウス・チクルスの2回目（2月定期）として、演奏機会の少ない交響曲第4番と札幌が過去に50回近く演奏している交響曲第2番を組合せ、内省的な楽想を持つ第4番と劇的な展開を見せる第2番が対照的に奏でられた。6月定期では、ヴェルディの「レクイエム」が吉田浩之、加納悦子ら豪華な独唱陣と札幌合唱団の共演で尾高の熱い思いが伝わる壮麗な響きをつくり上げた。さらに10月定期では、楽員との厚い信頼関係のもと、尾高は全身全霊でマーラーの魂のうねりを感じさせる第9番を聴かせた。今年、83歳になった首席客演指揮者ラドミル・エリシュカは、4月、11月定期と名曲シリーズに登場。演奏機会の少ないチェコの作曲家ヴォジシエクの交響曲をはじめ、得意のチェコ音楽の他にチャイコフスキー、ブラームスなど多彩な演目を覇気のあるタクトで劇的に表現した。他の客演指揮者では、元オーボエ奏者のマティアス・パーメルトがハイドンの交響曲「校長先生」（1月定期）を、児玉宏がブルックナーの交響曲第6番（9月定期）を豪快にドライブ、ペーター・フロールがショスタコヴィチの交響曲第15番（12月定期）を立体感のある演奏で聴かせた。

バーンスタインが、**パシフィック・ミュージック・フェスティバル**（PMF）を立ち上げてから今年で四半世紀を迎え、バーンスタインの立像設置、彼を讃える特別コンサートなど記念の年に相応しい内容が多く盛り込まれた。巨匠ロリン・マゼールを首席指揮者に迎えることも大きな目玉だったが急病で降板。PMF期間中の7月13日に逝去したことが惜しまれた。マゼールに代わり13年ぶりにPMFに登場したのが佐渡裕。佐渡は、起用が決まる以前の5月に「PMFスペシャルイベント」のため来札し、多くの観衆の前でPMFの想い出とこれからの期待することを語っていた。会期終盤で彼は、ショスタコヴィチの交響曲第5番を大編成オーケで豪放磊落にドライブさせた。他の指揮者としてはオスモ・パンスカがベートーヴェンの「第9」を熱演。札幌旭丘高校合唱部など地元高校生を中心に編成された合唱団が、清涼感溢れる響きを放った。アカデミー生の潜在的エネルギーを躍動的な指揮で引き出したジョン・ネルソン、対向配置で弦楽器を立体的に聴かせたガエタノ・デスピノサ、そして「ナクソス島のアリアドネ」を豊富なオペラ経験を持つ沼尻竜典がステージオペラとして伶俐にまとめ上げた。さらにエル・システマのメンバーでPMFアカデミー生としても参加経験があるドミンゴ・インドヤンや同じくPMFアカデミー出身のダニエル・マツカワの指揮ぶりはPMFの「歴史の成果」を印象づけた。今年の全プログラムを眺めると、道内公演中、実に半分以上が市民に無料で提供されている。バーンスタインの長女ジェイミー・バーンスタインのトークや教授陣、アカデミー生の室内楽など内容もかなり充実し、どの公演も盛況で、例年以上の入場者数となった。

**北海道二期会**は、ショパンの名曲を織り込み彼の生涯を象徴的に描いたジャコモ・オレーフィエ作曲オペラ「ショパン」

をダブルキャストで上演した。東園己、駒ヶ嶺ゆかりら出演者は、ショパンの名旋律にのせ彼の永続的な芸術性を見事に表現していた。**LCアルモーニカ**は、札幌コンサートホールを会場にして歌劇「運命の力」を原語全幕上演した。南出薫、斉藤みゆきらが札幌出演者に加え、客演の上本訓久、大塚博章が重厚な歌声を聴かせ、長尺な舞台にもかかわらず一瞬のゆるみもなく聴き手を引きつけた。

道内屈指の合唱団として、札幌とも共演の多い**札幌アカデミー合唱団**が、創立30周年の記念演奏会でシェーベルト、ヴェルディの「スタバート・マーテル」を同団代表で指揮者の永井征男が壮麗に奏でた。オペラのアリア、重唱をレパートリーにユニークな企画で聴衆を集める**男声合唱団Belcanto**が、結成から10年、20回目のコンサートを開催。同団のこれまでの活動や練習時の裏話を演劇仕立てに各団員の個性が伝わる舞台となった。

札幌出身のピアニストによるリサイタルでは、ベルリンから18年ぶりに帰国した吉泉善太が、「ウィーン、わが夢の街」と題しベートーヴェンのソナタなどで研鑽の成果を届け、京都芸大を今春卒業、京都市長賞を受賞した藤本志帆が得意のフランス作品などで初々しい演奏を披露。これとは対照的にベテラン遠藤郁子が、デビュー50周年を記念し、彼女の音楽人生が垣間見えるような大きな感動を与えるリサイタルをおこなった。

室内楽では、札幌首席弦楽楽器奏者でつくる**弦楽四重奏団ニューキタラホールカルテル**が、ショスタコヴィチやドビュッシーの作品を耽美な色彩感で奏でたが、結成から4年目のこのコンサートが最終公演となり惜しい限りだ。札幌ビオラ奏者物部憲一を中心とした**ムジカ・アンティカ・サッポロ**は、5月にオペラ草創期のアリアや序曲、さらにベルゴレージの「スタバート・マーテル」など声楽を加えた曲目で、12月には、札幌トランペット首席奏者福田善亮を迎えて2本のバロックトランペットによるソナタや協奏曲などで古楽の魅力を伝えた。滝川市出身で永らくリヨン歌劇場に在籍していた津留崎直紀が、日本ショパン協会理事の海老彰子と共にグリーグのチェロソナタなどを円熟した音楽性で聴かせた。札幌はフルート演奏が盛んだが、**札幌フルート協会**が主催するフルートフェスティバルが6月に開かれ、約百人によるフルートオーケストラや札幌出身で世界的フルーティスト工藤重典、酒井秀明を迎えて多彩なフルート作品が演奏された。11月には、同協会副会長の阿部博光がフルーティストとして活躍する長女礼奈とピアニスト妻佳子との息のあったリサイタルを、同じく副会長の八條美奈子が2回のサロン・リサイタルを開いた。さらに八條を中心にフルート特殊奏法のスペシャリスト多久潤一郎を招き6人のフルーティストがエンターテイナーな企画のステージをつくった。新進演奏家育成プロジェクト・リサイタル・シリーズSAPPROでは、中川知美がサン＝サーンスのソナタなどで叙情性溢れるクラリネットを聴かせた。ゴーストライターとして話題を集めた新垣隆が札幌在住の恩師や同窓が支援する中、作曲家、ピアニストとしての講演会やコンサートを開催し、多彩な音楽性と彼の人物に触れることができた。

**北海道作曲家協会**は、「第2回北海道の作曲家展」を6月に開催し、会員7名と一般公募した遠藤雅夫（日本作曲家協議会副会長）、木下大輔（宇都宮大学准教授）を加え個性溢れる作品を発表した。また、会員のレビュー系作品を集めた「スマイル・プロジェクト」をライブ形式で、さらに中国の学生を招き会員作品の課題曲と中国作品を含めた多彩な曲目で「第1回ヤングチャイナコンサート」を7月に開催した。**札幌コンサートホール**が主催する「キタラ・オルガンコンサート」では同協会の高野智恵子、10月には「北海道の作曲家個展シリーズ」で二橋潤一の作品が演奏されている。

今年は、道内音楽界に貢献した元札幌事務局長の竹津直男、谷口静司の両氏が7月に相次いで逝去し、12月には札幌現役ヴァイオリニスト石原ゆかりが急逝した。